

聖母と人魚

フィリピン映画におけるゲイ・カップル表象

山本 博之

2016年の東京国際映画祭でフィリピン映画の『ダイ・ビューティフル』(2016年)が上映され、コンペティション部門の最優秀男優賞(パオロ・バステロス)および観客賞を受賞した。フィリピンは一般に性的マイノリティが社会に受け入れられていると語られ、その根拠の1つとして映画に性的マイノリティがよく登場することが挙げられることも多い。『ダイ・ビューティフル』の高い評判は、フィリピンの社会と映画に対するそのような認識をさらに裏付けるものとなるだろう。日本で貧困・犯罪・暴力に偏って紹介されがちなフィリピン映画の多様さと豊かさを伝えるという意味で、性的マイノリティを主題とするフィリピン映画の評判が高まることは大いに歓迎すべきである。そのことを確認した上で、フィリピン映画における性的マイノリティの描かれ方がいかに多様で、どのような表現が試みられているかについても目を向けてみたい。

マニラのゲイ・シーンを描いて伝説の映画と呼ばれる作品に『マッチョダンサー』(1988年)がある。ただし、これは主人公である若い男性の肉体美で観客の関心を引く側面が大きく、ゲイ男性が幸福な日常生活を送ることに主眼が置かれていない。2000年代に入ると、デジタル技術の普及に助けられてインディペンデント映画でも性的マイノリティを扱う作品が増えていった。フィリピンのインディペンデント映画最大の映画祭であるシネマラヤ映画祭の第1回映画祭で上映された『マキシモは花ざかり』(2005年)は、女性の格好と仕草をする12歳の少年が主役である。

フィリピン映画で描かれるゲイ男性は、肉体美で観客の関心を引くタイプか、「男の体に女の心」のタイプかのいずれかであることが多い。とりわけ商業映画でその傾向が強く、外見や仕草で他の多くの男性と容易に見分けられないような(以下、「男性らしい」)男性どうしのゲイ・カップルが描かれることは少なく、あったとしても、2人がそれぞれ別の道を歩んだり死別したりして、ゲイ・カップルにとってハッピーエンドで

終わるものは皆無と言ってよい。

このような状況で、2016年に劇場公開された『第三者』(2016年)は、フィリピンの劇場映画ではじめて男性らしい男性どうしのゲイ・カップルがハッピーエンドを迎えた作品として話題になった。

本稿では、フィリピン映画の性的マイノリティの描き方にどのような試みが見られるかを考えるための素材として、『第三者』を中心に、商業映画における男性らしい男性どうしのゲイ・カップルについて考えてみたい¹⁾。

1. 商業映画におけるゲイ・カップル

フィリピンの商業映画でゲイが主要な役で登場するようになるのは1990年代後半以降のことである²⁾。大手の映画制作会社による劇場公開作品で男性らしい男性どうしのゲイ・カップルが物語で重要な位置を占めているものに『やわらかな心』と『イン・マイ・ライフ』がある。

1.1. 祝福されない——『やわらかな心』(1998年)

『やわらかな心』では、同僚がゲイだと知らずに誘惑して妊娠した女性がゲイ・カップルの家に押しかけて3人の暮らしが始まる。あらずじは以下の通り。

大家族で弟たちや妹たちをほぼ1人の稼ぎで養わなければならないアニーは、電話オペレーターとして勤める広告代理店の社内パーティーで正社員のロンを酔わせて一夜の関係を結ぶ。妊娠したアニーから結婚を迫られると、ロンは恋人がいるからと断る。ロンはゲイで、レストランのオーナーシェフのニックと一

1) 2010年代にフィリピンの国産映画の興行収入を塗り替えてきたウェン・デラマス監督とヴァイス・ガンダ主演のコンビによるゲイ・コメディ映画は別稿[山本2018]で検討したために本稿では扱わない。「LGBT」、「バクラ」、「ホモセクシュアル」などの表現については[山本2018]を参照されたい。

2) 台湾の『ウェディング・バンケット』(1993年)がフィリピンに紹介されたとき、成人男性どうしが恋人として抱き合う場面は観客から敬遠されていたという。

緒に暮らしていた。アニーは赤ちゃんの責任を取ってほしいと強く求める。アニーが妊娠したとだけ知らされたアニーの両親は喜び、アニーをロンたちの家に送り届ける。ロンとニックは赤ちゃんが生まれたら養子にするつもりでアニーを家に住ませることにする。

ロンの父親はゲイ嫌いでゲイを見つけては除隊させていた元軍人。ロンたちの家を訪ねてくる。ロンは父に自分がゲイだと告白できず、父の前ではアニーと恋人どうしのようにふるまう。ロンの父は孫ができたことと喜ぶがニックは不機嫌になる。アニーが男の子を出産するとロンは赤ちゃんの世話に多く時間を割くようになり、ニックの不満はさらに募る。そんなニックをアニーが慰め、2人は和解する。ニックの提案でアニーは恋人を探す。恋人候補のエンリコはアニーたちの関係を理解し、結婚したら4人で子育てすることに同意する。

会社ではアニーとロンが結婚すると聞いて祝福ムードだったが、アニーの同僚が事情を知り、ロンはゲイだと会社で噂になる。噂が事実ならロンは会社をクビになるか、少なくとも今後の昇進はないと直属の上司に言われるが、ロンは社内パーティーで噂は本当だと公表する。同僚たちは拍手で歓迎し、社長は、世の中には本当の自分を隠して望まない相手と結婚して偽りの人生を送らなければならない人もいるのに君は立派だと言ひ、ロンを昇進させる。アニーはエンリコと結婚し、ロンとニックと一緒に暮らす。

『やわらかな心』では、ゲイ男性が女性的な外見やふるまいをすることなく男性どうしでつきあっている。ロンとニックは別離することなく、ゲイ・カップルにとってハッピーエンドで終わる。2人は結婚しないが、別のゲイ・カップルが浜辺で神父立会いのもと結婚の儀式を挙げて友人たちに祝福されている場面があり、ゲイ・カップルにも結婚の道はある。また、ロンとニックの2人だけの子どもということではないが、アニーとエンリコと一緒に暮らすことでロンとニックは自分たちの子どもを育てることができる。

このようにゲイ・カップルがハッピーエンドを迎えている点で『やわらかな心』は特筆される作品だが、他方で、作品全体を通じて社会がゲイに対して否定的である様子が繰り返し描かれている。元軍人の父親はゲイを毛嫌っている。会社の上司はゲイだと昇進させないし解雇するかもしれないと言う。アニーと一緒に食事した知人男性は、通りかかったゲイ男性を見て悪態をつき、以前トイレでゲイを見つけたとき

に叩きのめして顔を便器に突っ込んでやったと得意げに話す³⁾。

家族や親しい人はロンたちがゲイだと知ると善意または寛大な心で対応しようとするが、その結果、ロンたちはゲイは何らかの原因で生じた異常事態または病気で回復または治療が可能だという扱いを受ける。アニーは、幼い頃に母親か他の女性との関係でトラウマがあって女性を避けているだけで、心の底では真の男性なのではないかと尋ねる。ロンの父は息子がゲイだと知って戸惑い、もっと早く相談してくれればちゃんと治療できたのにと言う。

ロンとニックのキスをはじめて見たアニーは卒倒する。空腹で倒れたのかと尋ねられ、男どうしでキスするのを見て倒れたのだと答えている。ロンとニックを演じた2人の役者はこの場面を演じるためにかなりの覚悟を必要としたそうで、キスシーンの撮影の前に2人でボトル1本分のワインを飲んだという。酔った勢いで撮影に臨んだのが事実であるかと別に、演技であっても男どうしでキスしたのは正気ではなかったのだと言ひ訳しなければならなかった当時の様子を物語っている。

ニックの設定上の国籍や経歴ははっきりしないが、英語をアメリカ風に話していることはアメリカでの生活経験があることを示唆しており、フィリピン社会で眉を顰められる行為の理由を外国に帰するという余地を残している。

『やわらかな心』は、男性らしい男性どうしのゲイ・カップルが離別しないという意味でハッピーエンドを迎えているが、ごく一部の理解者を除き、ロンとニックの生き方は肯定的に受け止められないまま物語が幕を閉じている。

1.2. 外国での暮らし

—『イン・マイ・ライフ』(2009年)

『イン・マイ・ライフ』は、ゲイのカップルとその1人の母との関係の物語で、頑固で世話焼きの母が息子を自分の思い通りにしようとして息子の恋人と対立する。あらすじは以下の通り。

図書館担当で頑固な教師シャーリーは別れた夫の名義の家に住んでいた。元夫から家を売りたいから退居してほしいと求められ、娘2人も家を売ること賛成したため、自分の居場所がないと感じてニューヨークに住む一人息子のマークを訪ねる。マークは2年前か

3)ゲイに対するこの対応に関して[山本 2018]も参照されたい。

ら男性の恋人ノエルと同居していた。シャリーはマークが高校時代からゲイだと知っていたが、そのことをよく思っていなかった。マークはアメリカ国籍を持つシャリーに対し、ノエルと偽装結婚してノエルがアメリカの永住権を取るのを手伝ってほしいと頼むが、シャリーは拒絶する。

マークに癌が見つかって手術する。手術前にシャリーに病氣と手術のことがうまく伝えられず、シャリーは自分に隠して手術をしたとノエルを責める。マークの手術は成功するが、交通事故で死ぬ。ノエルはマークの遺志に従ってマークを献体しようとするが、遺体をそのままフィリピンに連れ帰って埋葬したいと言うシャリーと対立する。母親は息子のことを全て知って決める権利があると主張するシャリーに対し、ノエルは母親だからといって全てを知っているとは限らないと反論し、殴り合いのけんかになる。最後にシャリーが折れ、マークの遺体を献体して散骨し、シャリーはノエルと入籍する。

『イン・マイ・ライフ』の物語の主題は母親が自分の子どもの生き方を管理しようとすることで、ゲイ性は物語の主題ではないものの、ゲイ・カップルが物語の中心に据えられている。この作品でゲイ男性は男性らしい外見やふるまいをしたまま恋人どうしとしてつきあっている⁴⁾。

母親のシャリーは息子がゲイであることをあまり喜ばしく思っていないが、高校時代からマークがゲイであることを知っていて拒絶していたわけではない。息子がゲイであることをシャリーが喜ばしく思わないのは息子にパートナーがいて自分の言うことを聞かないと思うため、ゲイであることが嫌悪されているわけではない。

しかし物語を一歩引いて見るならば、最終的にマークは作中で死んでおり、マークとノエルの関係はハッピーエンドになっていない。男性どうしのキスシーンがあることも、舞台がアメリカなのでフィリピンとは価値観が異なる社会での出来事として許容されると見ることもできる。

2. 涙も別れもない非ハッピーエンド ——『なぜいい男にはみんな男の恋人がいるの?』 (2016年)

2016年にはゲイを主役にする映画がいくつか話題になった⁵⁾。その筆頭は冒頭でも触れた『ダイ・ビューティフル』である。このほかに、『ダイ・ビューティフル』が東京国際映画祭で上映された数日前、『ダイ・ビューティフル』のジュン・ロブレス・ラナ監督と主演のパオロ・バレストロス(トリシャ役)が組んだ『なぜいい男にはみんな男の恋人がいるの?』がフィリピンの劇場で公開された。

この作品でパオロ・バレストロスが演じたのはゲイであることを隠しているウェディングプランナーのベンジである。密かに恋心を寄せ続けてきた幼馴染のジェゴと久しぶりに再会すると、ジェゴはベンジに婚約者のフィオナを紹介し、2か月後の結婚式を企画してほしいと依頼する。ベンジはゲイだと知られないように職場のカイリに恋人のふりをしてもらい、カイリと2人でジェゴたちの結婚式を企画する。カイリは最初につきあったベンジ以来、つきあってきた男はみな後でゲイだとわかり、自分は隠れゲイのカモフラージュ役としての価値しないと嘆いていた。カイリはジェゴのちょっとした仕草に隠れゲイである可能性を嗅ぎ取り、それが本当なら自分がジェゴと結ばれる可能性があるかと期待するベンジからジェゴのことを探るように頼まれる。仕事で忙しく海外を飛びまわっていて結婚式の打ち合わせを休みがちなフィオナの代役としてカイリがジェゴと結婚式の準備を進めていくうちに、カイリとジェゴはそれぞれ自分が相手に好意を抱いていることに気づく。

ジェゴを演じたデニス・トリロは『愛シテ、イマス。1941』(2004年)や『夫の恋人』(2013年、テレビドラマ)の出演を通じてゲイを演じる役者として知られており、カイリだけでなく観客もジェゴがゲイではないかと疑いながら物語の展開を見守ることで、男性らしい仕草と女性らしい仕草の境界の融解が試みられている⁶⁾。

5) 2016年にはテレビ放送でもゲイが主役のドラマが放映された。『君に会うまで』は、自分がゲイであることを隠しているアリが、親友のバスティとアイリスが恋人どうしになったことを知り、親友との関係と自分の恋心の間で揺れ動く。なお、ゲイが主役のテレビドラマで最初のものは『夫の恋人』だと言われている。

6) 厳格な元軍人であるジェゴの父親と異性装の自由人であるジェゴのおじ(おば)を同じ役者に演じさせていることも同様の演出上の工夫である。

4) ヴァイス・ガンダがノエルたちの友人の役で登場し、女性らしい仕草をするゲイの役割を担っている。

ただし、フィリピン映画史上でセリフに最も多く「バクラ」(ゲイ)という単語が出てくる映画だと言われることに示されるように、『なぜいい男にはみんな男の恋人がいるの?』はコメディ映画である。劇中に多数登場するゲイたちはいずれもコメディ映画の「文法」に従って描かれる。それは、女性らしい仕草を強調する描き方であり、ゲイどうしで結ばれることはあっても(それは笑いの対象である)、男性らしい男性と結ばれることはないという描き方である。

物語の最後でカイリとジェゴが結ばれ、ベンジは別のゲイ男性と結ばれる。伴侶を得たベンジの幸せそうな姿で物語が幕を閉じるが、想いを寄せる相手と結ばれなかったし、その相手が異性愛者として女性と結ばれたということは、『なぜいい男にはみんな男の恋人がいるの?』は、たとえ涙も別れもなくとも物語上はゲイにとってのハッピーエンドではない。

3. ゲイ・カップルのハッピーエンド ——『第三者』(2016年)

『第三者』は、女性らしい外見やふるまいをしない男性どうしのゲイ・カップルの間に妊娠した女性が入ってくる物語で、基本的な設定は『やわらかな心』と重なる部分がある。ただし『やわらかな心』から一步踏み込み、商業映画ではじめてコメディでないゲイ・カップルのハッピーエンドの物語とした。以下にあらすじをやや詳しく紹介する。

幼い頃に自分を残して外国に行ってしまった母に捨てられたアンディは、それほど裕福でない大家族の叔母の家で育った。大学の1年先輩で恋人のマックスは富裕な家庭に育ち、大学ではいつもアンディを助けてくれる。マックスは大学卒業の日、父親に言われて医者になるためにアメリカに留学することになったとアンディに告げ、遠距離恋愛はいやだというアンディはマックスと別れる。

アンディは大学を卒業すると叔母の家を出て部屋を借り、イベント企画の仕事につく。収入は安定せず、家賃を払えず部屋を追い出されるが、叔母の家には間借り人が入っていて戻れない。久しぶりに帰国したマックスと再会すると、アメリカの大学で知り合ったクリスチャンを恋人だと紹介される。私と付き合っていたときから本当はゲイだったのかと怒るアンディに対し、マックスは自分もよくわからないと答える。

アンディは友人を頼ってオーストラリアに移住し

ようと思い、渡航費用を得るためにイベントを企画するが、恋人のイニゴが売り上げを持ったまま別の女性とカナダに逃げてしまい、全財産を失い、仕事もクビになる。しかもアンディはイニゴとの間の赤ちゃんを身籠っていた。

別れたままの母親から何度か電話がかかってくるが、アンディは出ようとしない。住む家も生活費もない状態で出産して育てるのは無理だと思い、マックスの家を訪ねて墮胎できないか相談する。整形外科医のマックスも小児科医のクリスチャンも墮胎はできないと断るが、クリスチャンはアンディが出産した後で自分たちが引き取って育てたいと言う。

クリスチャンは、クリスチャンとマックスが住む家の空き部屋にアンディが寝泊まりすること、食費を含む生活費は全てクリスチャンが負担すること、出産して赤ちゃんを渡したらオーストラリアに行く渡航費用もビザ代もクリスチャンが出すことをアンディに提案する。子どもを育てたいと強く思っていたクリスチャンは養子をとろうとマックスに持ちかけていたが、マックスは見も知らない人の子を育てるのは気が進まないからと消極的な態度をとっていた。アンディは元恋人だから見も知らない人の子ではないというのがクリスチャンの言い分だった。

マックスは養子のことを完全に受け入れたわけではないが、クリスチャンとアンディは合意し、3人の共同生活が始まる。クリスチャンは母体と赤ちゃんのために何を食べるべきで何を食べてはならないかをアンディに細かく指示する。1つ屋根の下で暮らしているうちに元恋人どうしのアンディとマックスの距離が近づいていき、クリスチャンの不満そうな顔が増えていく。

クリスチャンはマックスとの関係を自分のペースで進めていこうとするが、マックスはいろいろなことへの心の準備が伴わない。自分がゲイで男の恋人と一緒に暮らしていることを両親に言えずにいる。覚悟を決めて両親に話そうと思い、家族で会食する場で話そうとしたところ、隣のテーブルで男どうしがいちゃついているのを見た父親が気色悪いと吐き捨てるように言ったのを聞き、マックスは自分がゲイだという言葉を呑み込み、同席したアンディのお腹に自分との子がいると言ってしまふ。学生時代からアンディのことを知っていた両親はマックスが父親になる決心がついたと喜び、マックスはその場の雰囲気吞まれて否定しないままになる。

マックスがお礼にアンディを夕食に誘い、そのお返

しにアンディが軽食に誘う。アンディの手持ちのお金で払えるのは学生時代によく食べていた路上で売られている串焼きだった。2人で串焼きを食べて家に帰ると、帰りが遅い2人を心配したクリスチャンが待っており、健康な赤ちゃんを産むためには路上で売っているような非衛生的なものを食べてはいけないと激しく怒る。

ある日、アンディとマックスが家にいるときにふとしたきっかけで2人がキスしてしまい、出張を1日早く切り上げて帰宅したクリスチャンに見られてしまう。クリスチャンは怒り、アンディは家を出ていく。クリスチャンは両親に自分との関係を話すこともアンディとの関係を清算することも自分で決断して行動するようにとマックスに求めるが、マックスの態度は煮え切らない。

行く場所がなくなったアンディは叔母たちから教えられていた母の家を訪ねる。アンディは幼い自分を置いて家を出て行った母への恨みを露にし、みんなには母は外国に出嫁ぎに行ったと言ってきたけれど本心では母は売春婦だと思っていたという厳しい言葉をぶつける。母は、経済的に貧しい状況で妊娠がわかり、どうしても自分には育てられないので墮胎しようかと考えたけれどそれもできず、やむを得ず叔母に預けることにしたと説明する。自分と同じ境遇だったことに気づいたアンディは母が過去にしたことを受け入れる。

クリスチャンは自分のペースでものごとを進めすぎたと反省する。マックスは覚悟を決め、両親に自分がゲイだと告白する。父は激怒して話し合いの場から出て行くが、母は息子の選択を受け入れ、父は経験したことがないことに直面して動揺しているだけなので冷静になる時間をあげるとマックスに頼む。

アンディが出産を迎え、病院に駆けつけたマックスとクリスチャンは2人とも父親だと言って出産に立ち会う。出産後、アンディは母親の支援で自分の店を開き、子どもと一緒に暮らす。マックスの父は息子とクリスチャンの生活を受け入れる。

むすび——聖母と人魚

コメディ映画の「文法」に従うならば、アンディはマックスと結婚して2人で赤ちゃんを育て、クリスチャンは別のゲイ男性と結ばれるという結末になったかもしれない。しかし『第三者』では、アンディは独身のまま子育てし、マックスとクリスチャンのカップ

ルはマックスの父親から家族として受け入れられる。男性らしい男性どうしのゲイ・カップルのハッピーエンドが商業映画として制作・公開されたのは特筆されるべきことである。

また、構成が似ている『やわらかな心』と比べると、同じような場面でありながら細かいところで描き方が異なる箇所がいくつもある。出産に立ち会うために駆けつけた2人の男性に看護師が「父親はどっちなの?」と尋ねると、『やわらかな心』でも『第三者』でも2人とも手を挙げるが、『やわらかな心』ではニックが手を下げてロンだけが父親だということになって看護師が納得するのに対し、『第三者』では2人が父親であることが受け入れられて話が進む。また、どちらの作品でも家で一方が相手のために料理するが、『やわらかな心』ではニックは料理を本業としているので家での料理もその延長として語られるのに対し、『第三者』ではクリスチャンは料理が本業ではなく、パートナーのために料理している様子が描かれる。『やわらかな心』でロンとニックがキスしたり抱き合ったりと親密にしているのはアニーが家から出ていきたくなるように芝居しているという言い訳がされるが、『第三者』でマックスとクリスチャンが親密にしているのは自分たちの気持ちに従っているため以外の事情は付け加えられない。

ただし、『第三者』の制作・公開によってゲイ・カップルのハッピーエンドがフィリピンの観客や社会に受け入れられたとは限らない。この作品には男どうしが恋人であることが周囲に受け入れられない様子も描かれている。同じ病院に勤務し、廊下を歩くと女性の看護師や患者が見とれてしまうほどのマックスとクリスチャンは、はじめのうち職場で互いに同僚としてふるまい、恋人どうしである様子は見せないが、後に自分たちの関係を公然にして病院の廊下を2人で手を繋いで歩くと、同僚や患者は奇妙なものを見たという顔をする。

男性どうしが親密にしている様子を見て居心地が悪くなるのは登場人物だけでなかった。出張で家を数日留守にするクリスチャンとそれを見送るマックスが別れのキスをする場面では、劇場の観客から気色悪いといわんばかりの悲鳴が上がったという。不特定多数の目に触れる状況でこのシーンはカットされ、2人は顔を寄せ合うが唇を重ねない⁷⁾。

『ダイ・ビューティフル』と比べて興行収入が低かつ

7) 例えばフィリピン航空の機内上映。クリスチャンとマックスが2人とも上半身裸になってベッドでじゃれあっている場面もカットされた。

たことから、フィリピンの観客は男性らしい男性どうしの恋愛や性愛を見ると居心地が悪くなり、『第三者』の試みはまだ十分な実を結ぶに至らなかったと考えるべきだろう。このような作品が制作された背景については今後の研究を待つとして、ここでは最後に制作者たちが『第三者』に込めた思いを考えてみたい。

アンディが間に入ってきたためにマックスとクリスチャンの関係が悪くなり、アンディが出て行ったことをきっかけに2人は口論になる。美術ギャラリーのような壁にたくさん絵画が飾られている場所で、クリスチャンとマックスは間に壁を挟んで向き合って口論する。2人の間の壁に飾られているのは、クリスチャンに面した側に聖母マリア、マックスに面した側に人魚の絵で、2枚の絵がちょうど裏表になるように飾られている。

自分たちだけで妊娠・出産ができないゲイ・カップルが処女懐胎で身籠った聖母マリアに憧れを抱くことは容易に理解できる。『やわらかな心』でも、ニックは子どもの頃に演劇に関心があり、何を演じたいか尋ねられて聖母マリアと答えている。しかし男の体で生まれた人が聖母マリアになるのは難しく、ゲイ男性はむしろ人魚に近いかもしれない。人魚は陸の世界と海の世界、あるいは人間の世界と魚の世界の両方で生きられることに加えて、上半身が人間で下半身が魚であるため、男女を区別する身体的特徴として最もわかりやすい部分の区別がつかない。そしてクリスチャンたちが人魚であるならば、妊娠しているが赤ちゃんの父は存在しないに等しいアンディは聖母マリアと重なる。聖母マリアになりたくても現実に自分たちは人魚なのだ気付いたクリスチャンは、アンディと手を結ぶことでそれぞれの願いがかなえられると理解したのではないだろうか。

参考文献

山本博之 2018 「フィリピンのゲイ・コメディ映画に投影された家族のかたち：ウェン・デラマス監督の『美女と親友』を中心に」 福岡まどか・福岡正太編著『東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ・国家・グローバル化』スタイルノート。(刊行予定)

映画

凡例：邦題 ①原題、②英題、③監督、④制作年、⑤制作国、⑥主な出演者、⑦日本での公開、⑧その他。

『愛シテ、イマス。1941』①Aishite Imasu 1941: Mahal Kita、③ジョエル・ラマンガン(Joel Lamangan)、④2004年、⑤フィリピン、⑥Judy Ann Santos (Inya役)、Raymart Santiago (Edilberto役)、Dennis Trillo (Ignacio役)、⑦2005年東京国際映画祭。

『イン・マイ・ライフ』①②In My Life、③オリビア・ラマサン (Olivia Lamasan)、④2009年、⑤フィリピン、⑥Wilma Santos (Shirly役)、Luis Manzano (Mark役)、John Lloyd Cruz (Noel役)。

『ウェディング・バンケット』①囍宴、②The Wedding Banquet、③アン・リー (Ang Lee)、④1993年、⑤台湾・アメリカ、⑦劇場公開。

『第三者』①②The Third Party、③ジェイソン・ポール・ラクサマナ (Jason Paul Laxamana)、④2016年、⑤フィリピン、⑥Angel Locsin (Andi役)、Sam Milby (Max役)、Zanjoe Marudo (Christian役)。

『ダイ・ビューティフル』①②Die Beautiful、③ジュン・ロブレス・ラナ (Jun Robles Lana)、④2016年、⑤フィリピン、⑥Paolo Ballesteros (Trisha役)、Christian Bables (Barbs役)、Joel Torre (Trishaの父親役)、⑦2016年東京国際映画祭。

『なぜいい男にはみんな男の恋人がいるの?』①Bakit Lahat ng Gwapo May Boyfriend、②Why Does Every Handsome Guy Have a Boyfriend?、③ジュン・ロブレス・ラナ (Jun Robles Lana)、④2016年、⑤フィリピン、⑥Anne Curtis (Kylie役)、Dennis Trillo (Diego役)、Paolo Ballesteros (Benj役)。

『マキシモは花ざかり』①Ang Pagdadalaga ni Maximo Oliveros、②The Blossoming of Maximo Oliveros、③アウレウス・ソリト (Aureus Solito)、④2005年、⑤フィリピン、⑥Nathan Lopez (Maximo役)、JR Valentin (Victor役)、Ping Medina (Bogs役)、⑦2006年東京フィルムメックス。

『マッチョダンサー』①②Macho Dancer、③リノ・ブロッカ (Lino Brocka)、④1988年、⑤フィリピン、⑥Daniel Fernando (Noel役)、Allan Paule (Pol役)、Jaclyn Jose (Bambi役)。

『やわらかな心』①Pusong Mamon、②Soft Hearts、③ジョエル・ラマンガン (Joel Lamangan)、④1998年、⑤フィリピン、⑥Lorna Tolentino (Annie役)、Eric Quizon (Nick役)、Albert Martinez (Ron役)、⑧原題 (マモンの心) のマモンとはフィリピンのスポンジ菓子。

テレビドラマ

凡例：邦題 ①原題、②英題、③監督、④放映期間、⑤放映局、⑥エピソード数、⑦制作国、⑧主な出演者、⑨日本での公開、⑩その他。

『夫の恋人』①②My Husband's Lover、③ドミニク・ザパタ(Dominic Zapata)、④2013年6月10日～10月18日、⑤GMA、⑥94話、⑦フィリピン、⑧Carla Abellana(Lally役)、Tom Rodriguez(Vincent役)、Dennis Trillo(Eric役)。

『君に会うまで』①②Till I Met You、③アントワネット・ハダオネ(Antoinette Jadaone)、④2016年8月29日～2017年1月20日、⑤ABS-CBN、⑥105話、⑦フィリピン、⑧James Reid(Basti役)、Nadine Lustre(Iris役)、JC Santos(Ali役)。